

「グローバルxローカル」を実践するソーシャルビジネス（コミュニティビジネス）

『野毛坂グローバル』の設立について

第1号プロジェクト：ゴミ屋敷を地域の場に

2016年11月22日

キャッチフレーズ： 超ローカルから始まるグローバル

野毛坂グローバル（横浜市西区西戸部町1-98 URL: <http://nogezaka-glocal.com> 共同代表：奥井利幸）を2016年11月22日に設立いたしましたのでお知らせします。

※グローバルとは「グローバル」と「ローカル」の合成語です。

地域課題解決のため、ソーシャルビジネス（コミュニティビジネス）として、収益と社会貢献のバランスを図りながら、多世代共生、多文化共生できる持続性ある活動をコミュニティで実践します。

背景：

共同代表の奥井は、青年海外協力隊に参加したことをきっかけとして、20年以上国際協力事業団（JICA）の専門家として発展途上国で働いてきました。

山岳民族の生活向上、農村の活性化、人と環境の共存する里山づくり、地域社会での障害者支援、地域社会での高齢者支援や人身売買被害者の保護などを、タイ、ミャンマーをはじめとするアジア各国で地域に根差して活動をしてきました。

いわば、「『途上国における』コミュニティ開発のプロ」、「『途上国における』社会的弱者支援のプロ」として『途上国援助』に関わってきました。

ところが最近、実は日本も途上国も地域社会の課題が共通することの気づきがありました。「産業の空洞化、過疎化、高齢化」や「地域のむすびつきの希薄化」などです。また、その取り組みにも共通するものが多くあると思います。そのため、途上国での経験を活かし、日本の地域の活性化を図り、社会から孤立する人を無くするため、2016年7月に日本に帰国し、野毛坂グローバルを横浜に設立しました。

ビジョン：住む人誰もが幸せを感じる地域づくり

私は「人間誰もが弱者」だと思います。例えば、十分なお金がない、障害がある、健康でない、などだけでなく、子育て中の親、言葉の不自由な外国人、家族の介護中の人、友達を作るのが苦手な人、ルールを守るのが苦手な人、など、、

「弱者が住みよい社会になること」が「誰もが幸せを感じる事ができる」ことにつながると思いませんか？

事業内容

1) 収益を求めない事業

1-1) コミュニティ事業:

「孤立する」地域の人達が交流しあい、学び合い、理解し、あうむすびつきの場を提供・運営

孤立する人とは、地域に住む高齢者、障害者、子育て中の親、外国人などが思い浮かびますが、

「人間誰もが弱者」「人間誰もが孤立」なので「すべての人」が対象です。交流会、勉強会、楽しみの会などを行い地域の結びつきを深めます。

第1号の事業として、横浜・野毛山にあるゴミ屋敷をゴミごと入手しコミュニティスペースとして再生予定です。

1-2) 講習会・調査・研究事業

講師派遣・講習会ワークショップ運営や地域での調査研究を大学などと共同で実施し活動の深化・広がりと成果の共有を図ります。

2) 「収益を求めない事業」を支えるために行う事業

2-1) シェアハウス・民泊事業:

シェアハウス・民泊事業の実施により安定的な収入源とし、また入居者・宿泊者を地域活性化のための資源として活用します

2-2) コンサルティング事業:

下記に関するコンサルティングを行います。

- ・国際協力・国際交流の企画、運営、評価
- ・中小企業の社会的事業(ソーシャルビジネス)としての海外進出協力
- ・コミュニティ活性化活動

※第1号プロジェクト：「ゴミ屋敷を地域の場に」詳細について別添資料をご覧ください。

■お問い合わせ先

野毛坂グローバル

URL: <http://nogezaka-glocal.com/>

mail: info@nogezaka-glocal.com

TEL 050-3594-2523

別添資料：

第1号プロジェクト「ゴミ屋敷を地域の場に」趣旨



この絵は、遠くに「みなとみらい」の観覧車やランドマークタワーが見える野毛山で、高齢者、障害者、子ども、外国人など「孤立しがちな人」が楽しく共生するイメージをあらわしています。

横浜の JR 桜木町駅 JR 桜木町駅から海側にでると近代的なみなとみらいですが、逆側は、野毛といわれる古い繁華街です。野毛は昭和の雰囲気の色濃く残しながらも最近オシャレな店が増えてきました。

その野毛を抜けて市長公舎や中央図書館の横を山手にすすみます。佐久間象山や中村汀女の碑がある野毛山公園を右手に見ながら坂道を登っていくと、その頂上付近に野毛山動物園の入り口があります。ここは無料で入場できる動物園として、また小動物とじかに触れ合える動物園として有名ですね。

この野毛山動物園を超えた場所は庶民的な住宅地が広がっています。「ブラタモリ」でも紹介された場所で、急斜面にへばりつくように住宅が密集してなっています。車も通れない道路に面していたり、前に道がなく階段だったりする家も少なくはありません。

その一角のこのゴミ屋敷があります。

内部はゴミだらけで畳は腐り、壁はボロボロです。

でも、躯体はしっかりしていました。

プロジェクトの目的/課題認識

私は「**誰もが弱者**」だと思います。例えば、十分なお金がない、障害がある、健康でない、などだけでなく、子育て中の親、言葉の不自由な外国人、家族の介護中の人、友達を作るのが苦手な人、ルールを守るのが苦手な人、など、、人間誰もが弱い部分をもって生きています。

「完璧な人間」はいません。

「弱い分を人には見せないように精一杯生きる」、それも素晴らしいのですが、むしろその弱い部分をさらけ出し、認めあうことにより、共感しあえ、人と人とがむすびつき、いたわりあい協力しあえる社会が実現できるのではないかと私は思います。

「弱い部分を隠し合う」関係ではなく「弱い部分があって当然と認め合う」関係です。

弱い部分があっても、完璧な人間でなくても、社会の一員として社会に参加できる「権利」があるはずです。いやむしろ弱い人間であることを自覚することにより、他人の弱い部分に敏感になれるのではないのでしょうか。

人間全員が弱い部分がある弱者ですが、「**弱者が住みよい社会になること**」が「**住む人誰もが幸せを感じることができる**」ことにつながると思いませんか？

そのために、まず**地域(コミュニティ)**で、弱い分を認め合い、交流し、学びあい、楽しむ場をつくることを地域で実践をはじめたいと思います。

【責任者について】

責任者の奥井利幸は、若いころに青年海外協力隊に参加したことをきっかけとして、長く国際協力事業団(JICA)の専門家として発展途上国で働いてきました。

山岳民族の生活向上、農村の活性化、人と環境の共存する里山づくり、地域社会での障害者支援、地域社会での高齢者支援や人身売買被害者の保護などを、タイ、ミャンマーをはじめとするアジア各国で地域に根差した活動をしてきました

。

それら仕事に共通するのは、「コミュニティベース」、「社会的弱者支援」をエンパワメントアプローチで実施してきたことです。

※「エンパワメント」とは、行政にたよるのではなく、住民や弱者が行動を起こすことにより社会をより良くしていこうという考え方です。

いわば、「途上国におけるコミュニティ開発のプロ」、「途上国における社会的弱者支援のプロ」として途上国援助に関わってきました。

でも、日本国内に関しては全く無知でした。「日本の事を知らずに海外での援助ができるのか」との思いも常に心に抱きながらの活動でした。

【東北大震災、『復興』を目指さない】

転機になったのが、東北大震災です。それまで日本の地域活性化における主要なステークホルダーは、自治体や商工会、自治会、民生委員など。いわば「地元の人」のみが中心に活動を行っていました。地域を一番よく知る人たちが「主体性」をもっていることは良いことなのですが、一方で既存のパワーバランスの中で新たな発想がでにくく、行政だのみになりやすい体質になっていたといっても過言ではないと思います。ところが、東北大震災を機に東北に行った人には、元商社マン、元銀行マンなどのサラリーマンなど「外部の新鮮な視点を持った人」が多く活躍しました。

さらに、ある団体の人が話してくれたのは、「自分たちは『復興』をしているのではない。新たな最先端の歴史を作っているんだ」ということです。つまり、「震災以前と同じ状態」は、「産業の空洞化、過疎化、高齢化の進んだ寂れた街」ということです。東北大震災がおきたことにより、それが少し早く来てしまっただけで、「街がかかえる本質的な問題」は震災があろうななかろうがあまり変わっていない、ということです。

「震災以前」に街を戻すのではなく、新しい形の街を作っているというのです。

途上国の地域でも、実は日本の地域と同じような課題を抱えています。産業の空洞化、過疎化、高齢化はまさに途上国で取り組んできた課題でした。「途上国で高齢化」というと驚く人がいるかもしれませんが、ほとんどの途上国では急速な高齢化が進んでいます。タイの高齢化のスピードは日本を上回っています。

東北での活動が、「日本全体の課題への活動」であるように、実は「世界のいたるところにある課題に対する答えを求める活動」でもあったのです。

逆に、世界の様々な取り組みは、日本での取り組みに有用な参考になることもありえるはずです。

「海外援助による地域活性化と社会的弱者支援」≡「グローバル」

と

「日本における地域活性化と社会的弱者支援」≡「ローカル」

グローバルとローカルの融合語である「グローカル」を名前にいれた「野毛坂グローバル」を設立して、多文化共生、多世代共生による地域課題解決を超ローカルに地域で実践しようとしています。

【インターカル(インターローカル)】

日本の各地の地域社会や団体の取り組みには、とても素晴らしい取り組みが沢山あると思います。また、世界の各地域の取り組みに関してもそうです。

その取り組みを学び合うことは有用です。政府と政府が情報交換・連携をおこなう「インターナショナル」ではなく、地域社会と地域社会が直接むすびつき連携を深めお互いの社会をより良くしていく。それをインターカル(インターローカル)として実践を行っていこうと思います。

例えば、近い将来には、東京など大都市でも高齢社会となります。地方のコミュニティと大都市のコミュニティとが結びつくことにより、すでに高齢化社会となっている過疎地の取り組みを大都市のコミュニティが学び、大都市の新しい技術や発想を地方のコミュニティは学ぶことができます。日本国内のコミュニティと海外のコミュニティとでも同様です。

【ナンバー1を目指さなくても良い】

インターカルがうまくいくのは、「質の良い競争」ができるためでもあります。例えば企業の競争であれば、激しい競争のなか、ある時は法令スレスレのことや、自社の利益を守るため有用な情報を囲い込むなどのことも必要かもしれません。ナンバー1 企業と、ナンバー2企業ではその利益には格段の差があるためです。

一方で地域社会での活動は、ナンバー1になる必要は全くありません。日本国内でも、日本国外でも、よい活動は積極的に取り入れればよいし、自分たちのノウハウを他の地域に伝えても何の損にもなりません。「ナンバー1を目指さなくても良い」インターカルは、これからの新たな社会の新規範になるかもしれません。

【プロジェクトの目的】

ゴミ屋敷を改装してコミュニティの場をつくれます。

ゴミ屋敷の一階部分の約 40 平方メートルを改装してコミュニティスペースとします。

そのゴミ屋敷は、このプロジェクトのために設立された「野毛坂グローバル」が「ゴミごと」取得をしました。

改装費用は約 250 万円かかりますが、その一部 30 万円を集めたいと思います。

このコミュニティの場は、「孤立する」地域の人達が交流しあい、学び合い、理解し、あうむすびつきの場とします。孤立する人とは、地域に住む高齢者、障害者、子育て中の親、外国人などが思い浮かびますが、「人間誰もが弱者」「人間誰もが孤立」なので「すべての人」が対象です。交流会、勉強会、楽しみの会などを行い地域の結びつきを深めます。

また、地域外の人たちとの結びつきをつなげるイベントを行います。

【コミュニティの場を支えるためにやること】

いくら良い活動でも「最低限のお金」がないと活動はできません。

コミュニティの場の利用料を徴収すると本当の意味での「弱者」が利用できなくなります。また、寄付や助成金に頼るのでは将来的な継続性に疑問もでてきます。

野毛坂グローバルでは「継続的な活動」のための収益元としてシェアハウスや民泊を運営します。

また、そのシェアハウス入居者や民泊宿泊者も「地域の資源」として地域活動に協力してもらいます。収益と貢献を両立させるソーシャルビジネス(コミュニティビジネス)として取り組みます。

※シェアハウスや民泊は「合法的」に行います

予算：

改装費・什器購入費 約 300 万円

クラウドファンディングなどを利用して調達予定

スケジュール：2017 年 3 月にオープン目指して準備中